

---

# 【青少年教育委員会】

渚ハル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【青少年教育委員会】

### 【Nコード】

N0494H

### 【作者名】

渚ハル

### 【あらすじ】

天見雅樹、十六歳。彼は今、最大のピンチに陥っていた。そう、  
.....彼は変態達に目をつけられてしまったのだ。ある偶然から始まった想像を絶する変態達との交流。それに伴って雅樹の日常は平凡から非日常へと移り変わっていく。それはやがて、雅樹の大切な者にまで侵略されていき.....。雅樹は変態達の魔の手から無事大切な者を守りきることはできるのかっ!?そして、穏やかな日常を取り戻すことはできるのかっ!?これは雅樹と変態達との壮大（笑）な戦いの記録である.....。

## 第一話『喜劇の始まり』

「これは由々しき事態じゃ！さっそく会議を始めねばならん！！」  
すべては長い顎髭の爺から始まった。

ええ、もう、地上に存在しているだけで不幸と悪意と吐き気。  
ついでに腐った卵のような体臭を撒き散らすだけの爺だ。正確に言うなら俺のせいだが落ち度はないはずだ。ないのである。あるはずがない。あつてたまるか！よって爺のせいなのだ。

爺は早速、年齢を感じさせない動きで四方八方に電話をかけていく。まるで数日ぶりに餌を見つけたライオンのようである。

俺はその姿を呆然と見守ることしかできない。天見雅樹十六歳。普通………とはちよつと言い難い私立高校に通うちよつと変わった高校生だ。ちなみに成績優秀、眉目秀麗。でも、それは置いておこう（ちらりと、ここではないどこかへ睨み、脅す）。

「雅樹くん！君、大丈夫かね！どこにも異常はないかね！？改造手術を受けたりはしていないかねっ！？」

ちよつと電話をかけ終わったのか、爺が俺の方に来て異様に心配する。爺は大柄なので首もとが俺の鼻のあたりにある。加齢臭がするので離れてもらいたいものだ。汚らわしい唾も飛んでくるし……でも俺は世間では真面目な優等生なはずなので、そんな本当のことは断じて言わない。ああ、俺ってなんて慈悲深いのだろう。時代が時代なら、斬首ものである。

「はい、大丈夫です。俺は正常です」

そのはずだ。この俺がシヨツ　ー程度にやられるものか。だが

「君は正常ではない!!」  
「.....」

こいつ、言い切りやがった.....。断言するなら最初から言うなとも思うが、それは言わない約束だ。誰との約束かは忘れたが。

「君は重い.....。重い病に冒されているのだ!でなければあんな身の毛もよだつような世にも恐ろしい事を言い出すはずがないだろうっ!?!」

ないだろうって.....。俺はそれには同意しかねます。三百六十度、どっから見ても、赤外線を使っても、俺は正常だ。異常があるのはお前の頭とこんな奴を生み出してしまった世界だろう。ちっ、世界の愚か者めっ!

今から俺がどうしてこんなに心配されているのかを説明してやる。誰にかは知らないが、せいぜい地面に頭を擦りつけんばかりに下げて感謝しろ。

「あれはわしが二十歳の頃じゃった。それはそれは運命的な出会いで.....」

爺は黙ってる!

では、気を取り直して.....。

「あれはわしが二十一の頃じゃった。駅のホームで初めて見かけた彼女は」

もういいって! てか一年前の運命的な出会いはどうしちゃったの!?!こいつ地味に黒いよっ!

ふう、爺を相手にすると疲れる……。やっぱり話しをするなら、綺麗な女性に限るな。

あれは

「二度あることは三度ある！」

爺が突然叫び出す。

「何がですかっ！」

「いや、天からそう言うように聞こえてきた気が……」

重い病に冒されてんの絶対あんたの方だろっ！

爺が「ばあさんやわしはまだ死ぬわけにはいかん！離してくれー！」とかもう逝っちゃう寸前のような事を叫ぶ。ばあさんは死神か何かなのだろうか。ばあさんっ！頑張れっ！！とつととそのグズを焼却炉（火葬場）にぶち込んでやってくれっ！！まあ、何にしても今がチャンスだ。そう、あれは一時間くらい前の事だった。

「あっ、おはようございます、天見さん」

そう爽やか(?)に声をかけてきたのは二十代前半くらいで、茶髪のロンゲに鼻ピアスという、いかにも『不良』です！と言わんばかりの格好をした蟹塚さんだ。この人と俺の関係は おいおい説明するから待ってる。

とにかく蟹塚さんに声をかけられた。

それが俺に落ちてきた一つ目の不運だ。ぶっちゃけ俺は彼が嫌いだ。不運の理由はそれだけ。なんか生理的に嫌。まあ、人間ってそんなもんじゃね？

「そういえば今日は報告日でしたね。今から会長室ですか？」

「はい、そうです」

「ご苦労様です、会長への報告は一苦労ですからね。雅樹くんは会長と直接会うのは初めてですよね？」

「そうですね……。ちょっと不安です」

俺はとりあえず笑っておく。お前に会ったせいで気分も体調も最悪だよ。俺が蟹塚を嫌っている理由は強いて言うならば、あるにはある。とりあえず不良っぽい見た目なのにやたらと丁寧で爽やかなのが嫌。ギャップを狙ってるのか知らないが、俺は嫌いだ、そういうの、なんか人を騙しているみたいじゃないか（自分のことは棚上げ）。俺の個人的評価だから気にしないでくれ。でも、死ぬっ！

「あ、そうそう、聞きました？」

ん？なんだ？まだ話があるのか？とつとつと言え。

「今日の報告で調査員への指令が決まるらしいですよ」

「あれ、そうだったんですか？」

そんなの全然知らなかった。たまには役に立つじゃないか蟹塚。

「たまには」だが。無能な先輩を持つと、困るものだ。

そのまま数分の間、立ち話（嫌々ながら）をして俺は蟹塚を別れた。……蟹塚、空気読め。

俺の真っ正面にあるのは巨大なビル。いつ見ても無駄にでかい。

その玄関口にはこの施設の名称が記してある。

『青少年教育委員会』。名前は立派だが騙されてはいけない。この施設は悪魔の施設なのだ。教育委員会とは名ばかりの自分達の趣味を純粋な子供達に押しつけようとしているのである。

なにしろ、設立理由だって最悪だ。イかれているとしか思えない。あまりの情けなさに涙が出て来そうだ……。

ある一人の変態がいました。でもその変態は誰にも家族さえにも理解もされず、見向きもされず嘆き悲しみ絶望していました。その扱いはゴミを扱うよりも粗雑だったとか……。

その時、変態は考えつきました。みんなが僕と同じ趣味だったらいいんだ。そうだったらみんなが僕を理解し、賛同してくれると。幸い実家が金持ちだったその変態は、ボケの始まった父親を最初の犠牲者とし、洗脳。そによって手に入れたコネと資金力を元に、ある田舎に『青少年教育委員会』を設立しました。国もその資金力の前に屈したとか……。やがて一人で変態が設立した『青少年教育委員会』に全国の同じ心の痛みを抱える変態が集まってきました。そして一人の変態は多くの変態となったのです。めでたし、めでたし……。

こんな訳だ。つまり「赤信号、みんなで渡れば恐くない」と同じ考え方である。これだから金持ちってのは怖い。やることなすこと無茶苦茶だ。

また、俺がこの委員会に入ることになったのも悲劇的な理由がある。

回想、二回目開始。

あれは優しく、面倒見の良い俺が泣いている迷子の小学生くらいの女の子の母親と一緒に探してあげている時のことだった。本当はめつつちゃくちゃ面倒だったが、優等生で通っている俺は無視できるはずもない。迷子になるのが悪いよな。うん。

俺が女の子と手を繋いで探し回って歩いていると、急に肩を叩かれた。最初は母親かとも思ったが、振り返ってみると、俺の肩を叩いたのは、太った中年のおっさんだった。俺は触れられた肩を今す

ぐ払って、服を洗濯し、風呂で洗いたい気持ちでいっぱいだったが、なんとか我慢する。顔を見てみると、何故かおっさんは涙を流していた。すっげえ、気持ち悪い顔だった……。

「分かるっ！分かるぞっ！君の気持ち！」

何故かおっさんは、握り拳を作って語り始めるあまりに突然のことに、さすがの俺も呆気にとられてしまう。

「はい？」

「だ・か・ら！こんな可愛い女の子なら誘拐して、あんな事やこんな事をしたくなる気持ちだよ！同士よ！私には痛いほど分かるのだっ……！」

そんな事を言う。あの時、俺は背筋が震えるのを感じたのを鮮明に覚えている。今にして思えば、あれは恐怖と呼べる感情だったのかもしれない。誘拐だのなんだのとアホな事を口走っていたが、その言葉には魂が込められていた。

「誘拐っ！？俺はそんなこと！」

「しかしっ！しかし、それはこの荒みきった現代では犯罪とされてしまうのだっ！！どうかその熱く煮えたぎった体と心を静めて思いとどまるんだっ！！君はこんな所で捕まっつていい男ではないっ！！」

「はっ？あんた何言っつて」

むしろ現代が荒みきっているのはお前みたなのがいるからだろうという言葉を俺は必死で飲み込む。落ち着け！俺は優等生なんだ！優等生らしく、冷静に対処するんだ……。

「目を見れば分かる。君は私の同士だ！」



……人の話しを聞けっ！こういう輩の悪い所は、人の話を聞かない所だ。たとえ聞いたとしても、事実をねじ曲げ、勝手に自分の都合のいいように解釈してしまう。こいつらにはネガティブさが足らんな……。某漫画の絶　先生を見習って欲しいくらいだ。絶望しろっ！

そんな事を考えている間に、周りからヒソヒソ話が聞こえ始める。「やだっ！？誘拐ですって！」「あんなにいたいけな少女を！？」……鬼畜」「警察呼ぶ？」どうか待ってくれ俺は無罪なんだ。警察は呼ばないでっ！

俺は焦る。焦って当然だ、優等生だって焦るんだっ！その間にも、目の前に存在する変態野郎は口を閉じようとはしない。

「同じじゃない！俺はノーマルだ！」

「誰でも特殊な趣味、性癖というものは認めたくないものだ」

「違ーうー！！」

俺は叫ぶ。はっ、と自分の仮面が剥がれ掛かっていることに気づく。俺は自己を無理矢理仮面で縛り付けた。しかし、世間は俺の都合などお構いなしである。あろうことか、さっきの考えを、俺は口に出してしまっていたらしい。周囲がさらにざわめきだす。

「いきなり叫びだしたぞ！」「もしかして、そんなことまで！？」  
「縛るなんて……」「どれだけサディストなんだ！」「ぼっ  
！」

誤解だ。とんでもない墓穴を掘ってしまったらしい。このままでは明日の新聞の一面を飾ってしまうこと間違いなしだ。

『高校生が小学生を誘拐未遂。道で騒いでいたところを近所の住民に通報される。誘拐を止めた中年男性お手柄』

「あんなにいい奴だったのに……」「これが天見の本性だったとは……」「私達の前ではいつも真面目な優等生でした」「……憧れてたのっ！」「クラスメイトの声。」

こんなことになりかねない。てゆうかなんでこの変態おっさんがお手柄なんだよ！？なんか世の中間違ってる……。

俺はとりあえず、この場を離れることにする。逃げるみたいで嫌だが、犯罪者になるのはもっと嫌だ。いくら俺のような、純粋潔白の好青年であろうと、法の下では無力。世間で変態と認知され、憐れに死んでしまう……。

近隣住民の「逃げたぞ！」「少女が！？」の声を無視して、俺は移動する。さつきまで笑っていた女の子は……、やっぱり笑っていた。お前のせいだというのに……。やはり、この時の俺は少なからず動揺していたのだろう。少女を置いて行くという一番安全で適当な選択肢を失念してしまったいた。

なんとか近隣住民は振り切ったが、最大の敵は俺達についてきていた。まったく忌々しい。

「今ならまだ間に合う！早くその子を解放するんだ！」

「俺は迷子になったこの子の親を捜しているだけだ！」

「言い訳はいい！」

「どうして言い訳って分かるんだ！？」

思わず俺は怒鳴ってしまった。幸い近くに人の姿はない。

「それは……」

「それは？」

良い所を突いたと思って、俺はニヤリとする。

「私も同じ言い訳をしたことがあるからだ!」

「威張って言うな! てゆうか誘拐したことあるのかよ!」

「無論だ!」

「だからいばるな!」

さすがは変態。とんでもない解答ありがとう。言い争いのせいで俺の息はハア、ハアと乱れる。

「そんなに興奮して……、もう我慢できないのか? でもやっぱり妄想と二次元でなんとか耐えるべきだ……」

おっさんは悲しそうに言う。

「あんたは何が何でも俺は誘拐犯にしたいのか!」

「ああ、その通りだ!」

変態に迷いはないのである。

「どうしてだよ!」

「仲間は一人でも多い方がいいだろう! それがウチの方針だ!」

「俺は仲間じゃねえ!」

もう優等生もへったくれもない。

「私達の所へ来れば、そんな考えもすぐ変わる」

「お前達の……所?」

「『青少年教育委員会』だ」

「聞いたことねえよ! どんな委員だよ! そんないかがわしい名前つけやがって!」

「極秘の存在だからな。国は言いくるめられたが、さすがに公にし

られたりしたらまずい。名前は意外とまともだが、やってることがやばい。民衆にばれたら良くて解体、悪くて刑務所行きだ」

「悪いことって分かってるならやめろよっ!」

「馬鹿を言っな! 幼女の観察は私の生き甲斐、存在理由だ! それを禁じることなど万死に値する! 確かに誘拐はやりすぎだが、幼女を見て何が悪い! 目つきがいやらしいだなんだと言うが、それはどんな目つきだ! 科学的に証明してみせろよっ!?!」

無茶苦茶で子供だ。だがそれが変態である。

「という訳で君も『青少年教育委員会』に入れ!」

「どついう訳だよっ!」

「国民の義務だ」

「明らかに不要な教育だろうがっ!」

「そんなに照れなくても大丈夫だ、私が責任を持って幼女のノウハウを君に教えよう」

「照れてないし、そんなノウハウはいらないっ!」

不毛な会話を続けることおよそ三時間。そんなこんながあつて結局、疲れ果てた俺は強引に『青少年教育委員会』に入会させられた訳だ。変態の体力、悔りが足し……。あの中年め、いつかぶつ殺す!

ちなみに、少女は変態と口論している間に、欠伸をしながら「飽きた」と言いながら帰ったそうさ

俺は憂鬱な気分で玄関を見つめる。

これから会長に会わないといけない。はっきり言って気分だけで死ぬそうさ。『青少年教育委員会』の会長はそれくらいぶとんでいる。実際に会ったことはないが、そうに決まっている。変態達を束ねる王、キングオブヘンタイだ。それも当然だろう。

いつまでもこうしている訳にもいかず、俺は観念して玄関をくぐる。

相変わらず無駄に金をかけている。床に轆かれた絨毯も、掛けられている絵も、どれもこれもが高級そうだ。前に一度見た時にも思ったが、あの絵、作者がモネとかなってるが、まさか本物か？いや、まさかな……。絵から目を逸らせながらも、背筋を伝う一筋の汗。

俺はエレベータに乗り、最上階のボタンを押す。最上階は三十階高所恐怖症な俺としては最悪だ。しかもエレベーターから下を見下ろせる作りになっているから目も開けてられない。エレベーターにまで高級志向する必要はないと思うのは俺だけか？所詮、上がったりがったりするだけの物体だというのに。

小さな音をたてて、エレベーターが止まる。足下は、それはそれは、素晴らしい眺めになっていることだろう（ちなみにマジックミラー）。

ドアが開くとそこは別世界。悪い意味で。変なアニメのポスターやら同人誌やらで埋め尽くされている。元は豪華絢爛な会長室だったらしいが、これではただのオタクの部屋である。現実問題、オタクの部屋なのだろうが、曲がりなりにも会長なのだから、威厳とか尊厳とか大丈夫なのだろうか。

「おお、やっと来たかね、待ちわびたよ天見くん」

「……………俺は会いたくなかったけどな。」

そう言ったのは髭の爺。目はこっちは向いていない、部屋にある大型テレビに夢中だ。見ていたのはフラダースの犬。明らかに生命力に溢れていたはずの犬が、主の死と同時に謎の死を遂げるアニメだ。

「パ、パトッ シュ！逝かないでくれえ〜！」

はんかちを噛みながら、画面に手を伸ばす会長。一体何歳なんだろう、この爺……。しかも 口は無視らしい。

数分後。きちんとエンディングまで見終わってから、やっとこつちを向く。待ちわびたつてのは完全に嘘に違いない。嬉しいが……。

「待たせたな、最後まで見ないのはアニメに対する冒涇じゃからな」  
「……………そうですか」

「さて、報告してもらおうかの」  
「……………はい」

俺はこの『青少年教育委員会』において少年を視点とした意見を述べる役割を与えられている。青少年の視点から、今の青少年についての意見を言うのである。一件まともそうだが、そうではないのは理解してくれるだろう。もし、理解できないのであれば、そいつは変態に違いない。

だが俺の場合、意見しようにも

「……………特にありません」

なにもないのである。

「……………」

重苦しい沈黙。

「君はいつもそれだそうだね……………。中島くんに聞いているよ。君は素直にならないと」

爺の悲しみにくれるような声。どうやら失望しているらしい。

「……………すみません」

それ以外どう言えばいいんだよ……………。下手な事を言つと、また変な事に巻き込まれかねないしな……………。

「中島くんの推薦というから君には期待していたのだが……………」

最近知つたが、中島というのは、俺を巻き込んだあの忌々しい中年のおっさんのことだ。

「君はここに入ってどのくらいだ？」

「え〜と、半年ですね」

「……………半年か、それくらいすれば普通は嬉々として報告に来るものだが……………」

「こねえよ！中島の死亡報告なら別だが……………」

「君はまだ一度もちゃんとした報告をしていないね？」

「……………」

「ふう……………」

爺は溜息を吐く。本当に溜息を吐きたいのは俺だ。

「君とは一度、腹を割って話そうと思っていたのだよ」

「はっ？」

俺は話すことなんてないんだけど。

爺は唐突に言う。

「君は幼女好きと聞いたが？」

「違います!」

「中島くんからはそう聞いているのだが、違うのかね？」

「はい!」

俺は全力で否定する。中島め!今なら殺意だけで人を殺せる気がした。不気味な音を立てながら、禍々しいオーラが具現化しそうだ。

「…………むう、じゃあ何がクルのかね？」

爺は唸りながら問う。それは予想外の質問だった。

「猫耳、メイド、幼女、巫女、ツンデレ、妹、幼馴染みジャンルは多種多様にあるが」

「……………」

「黙ってちゃ分からんよ」

黙っているしか方法はない。何か言えば、また過大解釈されてしまっただろうから。

「やっぱり幼女かね？」

「違います!」

さっきの繰り返しである。もう白状するしかない。そう 真実を

!!

「……………どれも好きじゃありません」

「ん？」

「どれも好きじゃありません!」

とうとう言った。俺は言えたんだ!これでやっとここから解放さ



れるかもしれん。俺は開放感に酔いしれる。

「× あがが#\$」

爺は口を大きく開いたまま、意味不明の言葉を発している。変態にしか聞き取れないものなのかもしれない。

「な、なんということだ!？」

爺がやっと俺の聞き取れる言葉を発したのは、それから十分くらい経った後だった。無視して帰ろうかと思っただが、俺がやっと口にした決意の言葉を年寄りの必殺技『忘却』を使用されては敵わないので残っていた。

「な、な、な、なんということなのだ!？」

もうそれいいから……。

「君は正気か!？」

お前が正気か?そう問いたかったが我慢する。爺の目はどっかにいつちゃっていた。妖のそれだ。

「もちろん、正気ですが?」

爺は虚ろな目をしていたが、なんとか自分を取り戻す。

「え〜と、君は……頭や下半身に……その……も、問題があるのかな?」

「っ!?!」

なんて失礼な爺だ。もちろん現役バリバリ じゃなくて、なんて事を聞きやがる！もしそれが本当だったらどうする気だ！自殺してしまっくらのダメーじを男に負わせる言葉だぞ！頭だつて極めて正常だ。さつきから、中島と爺の殺害方法を百程考えているんだからな。ふっふっふ。

「ま、まさか」

「……………大丈夫です」

爺が言い終える前に、なんとかそれだけを言う。声音は低くなっているが、当然だ。怒りが込み上げてくる。

その言葉を聞いて、爺があからさまにホッとす。

「それは良かった。さすがにその年でそれはないか……………」

一息入れて、

「じゃあなんの病気なのかね？」

「障害や病気から離れる！……………離れてください！」

危ない、危ない。危うく怒鳴り散らす所だった。俺は優等生……………優等生なのだ……………。

「萌えない……………、だけど病気じゃない……………、だとすると……………あ、あっちの趣味か！さすがにそれは私の管轄外だ！」

何を想像したのかは大体想像がつく。こら、尻を隠すな！後ずさるな！

「誤解しないでください。それも違います」  
「じゃあ、なんだと言うのだ……」

呆れたような表情をされる。俺はもう呆れを遙か彼方を通り越して、最早苦笑さえでてこない。

「だから俺はノーマルなんです」  
「……なんだって？」  
「ノーマルなんです！」  
「……」

あれだんだん雰囲気が悪くなってきたぞ……？俺なんか変なこと言ったか？言ったのか？

「そ、」  
「そ？」  
「そ、そ、そ、そんな馬鹿な……！！！！！！」

今日、一番の絶叫。  
そして爺は急に怒り出す。

「なんとというヘタレな少年だ！ノーマルだと！？日本男児がそんなものでどうする！もっと犯罪を犯すくらいの気概を持たねばいかん！」  
「は、犯罪って……」  
「我々の属性の前ですべての犯罪行為は正当化される！」  
「そんな訳ないでしょう！」

爺はそこで表情一変、満面の笑みになる。

「君は少し疲れているだけなんだよ、そう、さっき見ていた口と  
パト ッシユのように！」

「ああ、もう、どうしたらいいんだ………」

俺はどこかへどんどん落ちていくような気がした。

## 『青少年の憂鬱』

以上、回想終了。

今、俺がいるのは会長室の下にある、大会議室。その会議室の百近くある席は俺を取り囲むように設置され、すべて人で埋まっている。皆一様に真剣な面持ちで俺を見つめている。まるで面接か裁判みたいだ。

俺の後ろにいた爺が囁く。

「これだけの人が雅樹くんのことを心配して駆けつけてくれたんだよ、良かったね」

良くねえよ。むしろ俺はここに集まった人のことを本気で心配しているくらいだ。えっと、大丈夫？

「さあ、始めようか」

爺が一際大きな席に座り、重苦しく言う。

それだけでざわついていた場が静まる。こういう連帯感だけは凄いんだな……。

「みんなには雅樹くんの事を事前に話したと思うが、何か質問はあるかな？」

爺の言葉で一人の男が手を挙げる。爺が促すとその男は立ち上がった。

「お、俺にはノーマルな男がいるなんて信じられません！ツンデレで萌えないはずがないでしょう！証明してみせてください。俺は、俺は……」

男はぎゅっと拳を握り、涙を流す。男の発言に場にいる者、誰もが頷く。どっかに納得する部分なんてあったか……？

「その質問はもっともじゃ。私も俄には信じられん。では試してみようではないか」

俺にも信じられない……、こいつらの存在が……。今までオタクとか気持ち悪いものと考えていたが、それは大きな

誤りだ。この瞬間オタクとは俺の中で恐怖の代名詞となった。

爺がパンパンと手を叩く。

会議室のドアが乱暴に開けられ、誰かが入ってきた。その途端に「おお、雅ちゃん!」「今日も可愛いヨ!」なんて声が聞こえてくる。

爺が俺を見ながら少女を紹介する。

「彼女は雅ちゃんじゃ。『青少年教育委員会』お抱えのツンデレ少女じゃ」

お抱えって……、アイドル事務所じゃないんだから……どこかで拉致してきたのかもしれない。

「では雅ちゃん、頼む」

爺が頭を下げると、雅への声援が止む。

雅はもじもじと、顔を赤く染めて、

「べつ、別に貴方のために来てあげた訳じゃないのよ?!勘違いしないでよね!」

と、言った。

俺の感想。何がなんだか分からない。ぶっちゃけ、どうでもいいし。とりあえず愛想笑いを忘れずに。

しかし、そう思ったのは俺だけだったらしく「くうう、今日も雅ちゃんに萌え〜!」「顔を赤くする君が好きだ!」「らしい。」

「……」

「す、素晴らしい!素晴らしい!感動で涙が出てくるよ!どっかい雅樹くん、今のは目の覚めるような萌えだったろう!?!」

「……」

俺に続くように、

「……」

長い沈黙。

そこで誰かが呟いた。

「……馬鹿な」「無反応だなんて……!?!」「……」

・恐ろしい子」「まさかあのくらいじゃ温いのかも!?!」「それだ

！」しかし、その後、猫耳、メイド、妹系と何が出てきても俺の反応は変わらない。

「重傷だ……」

爺が呟く。

席の一番前に座っている人が手を挙げた。会議室で唯一の女性だ。しかもけっこう美人だった。妙齡の美女って感じた。

「あ、あの人は！？」「最高幹部が一人、明神さん！」「明神さんなら、あの子に引導をつ！」会議室が一斉にざわつく。

どうやらすごい人らしい。最高幹部って初めて聞いたぞ……。その女性は唐突に手を組んで膝を着く。

「神よ！この子にどうか救いの手をっ！」

高々に叫ぶ。聖母のような笑みで。それに呼応するかのように会議室に活気が満ちはじめ。ある人は明神さんに続いて、祈り出す。ある人は「シスター明神、萌え」ある人は、賛美歌を歌い出す。

……カオスだ。

さらには、

「おおおおおおおおおお……！！！！！！」

それらが一致団結してしまった。

やっぱりあの女性もダメだった。いわゆる腐女子というやつである。せつかく美人なのに非常にもつたいない……。

「さっそく救う方法を考えましょう。こうなった以上、なんとかしてでも雅樹くんには立派に男として成長してもらいます。そのためには多少荒っぽく、非人道的な方法でもしかたないでしょう」

「しかたなくねえっ！……ってスルーですかっ！？」

俺の声は当然のように無視された。

もう俺の意志の存在は無視らしい。

そして着々と俺の脱・ノーマル化計画が進められていく。

俺って世界一不幸なんじゃないだろうか……。

自分の無力さを痛感しながら、俺はそう思った。





『青少年の憂鬱』(後書き)

どんどん加速してってます(笑  
コメント良かったらお願いします!!

## 『続・青少年の憂鬱』

会議はその後俺を無視して続けられていった。時間にしておよそ五時間。真面目で優等生な俺でもそろそろ発狂しそうだ。俺以外の変態連中は、和気藹々といった雰囲気。……恨めしい。死ねばいいのに。

すると、やっと話がついたのか、爺が俺の方を向く。

「ちょっと待たせたね、雅樹くん」

ちよっとじゃねえだろ、とツツコム気力も残っていない。どうやら、ここにいる世界最強のオタク達には五時間などちよっとらしい。自分の好きなことをしている間は時間の進みが早く感じるのだろう。俺としては迷惑なだけだ。

「では、発表しよう」

まるで何かの授賞式のような。てか発表なんてしないでいいです。

「天見雅樹どの、貴方が人として男として立派に更正したことをここに証します。」

爺はその後も長々としゃべっていたが、俺はポカンと口を開け、呆然としていた。

「……な、何やってるんですか？」

「『青年教育委員会』会長……ん？一体何かね？」

「いや、……何してるのかと……」

「見て分らんかね？どっからどう見ても、雅樹くんの表彰式じゃ

が？」

「表彰って何の………？」

爺は一体何を言ってるのか分からないという顔をする。というより、途中で邪魔されてご機嫌斜めのようだ。

「そりゃ雅樹くんがこの五年間で萌え男子として成長したことを祝してだよ。うん、うん、いろいろあったな、暗い独房に入れられながらも、脳内に作った妹に「おにいちゃん」と呼ばせて孤独を耐えきったあの日々………」

何か分からんが、爺の脳内ではもう五年の月日が流れているようだ。しかも萌え男子………最悪なネーミングだ………。しかも独房に入れられてるよ………。しかもすごい変態だし！この爺も残り少ないなと思っていると、ここでやっと事態に気づいた役員が爺に耳打ちする。

「ふむ、ふむ、なんじゃと!？」

と爺が慌てている。

「………少し勘違いしていたようじゃな」

「少しじゃないでしょう………」

俺は呆れる。ボケが始まったか………。

「なにを言うか！人間寛大でなければいかんぞ！幼女から熟女まで深く、深く愛していけるようでないとおつ！」

それってただ節操ないだけだろ………。熟女は百歩譲って良

いとしても、幼女はまずいだらう。

「しかし、せつかく四時間五十五分かけて作った証明証が無駄になつてしまつたわい……」

え！？待たされてたのつてそれが理由！？話し合いつてたつたの五分かよ！ふざけてんのかよっ！？ふざけんなよっ！？

「まあ、いい」

「……良くないですけど、いいです」

「では改めて雅樹くんへの指令を発表するぞ」

「し、指令ですか？」

なんとなく嫌な予感がするんですが……。こう靴ひもが両足同時に切れた上に、靴底に穴が開いてた時くらいに。

またしても重苦しい沈黙。でも分かつている。こういう雰囲気の時はいくらくな事にならないって事を。

「題して雅樹くんを萌え男子にしてしまおう作戦じゃ！」

「それだと萌えてるのが俺なのか、萌えられているのが俺なのか分からないんですが……」

「するどい指摘じゃ！……」

そう言うつとまた会議が始まつてしまった。「何がよいかの？」

雅樹萌え」「それだと雅樹くんが萌えられる立場だろ」「あ、そっ

か」「でも雅樹くんを受けにすれば……」「おお、萌えだ……

……」「これはすごい！萌える側の壁と萌えさせる側の壁を超越している！」「では我々は敬意を持って彼をこう呼ぶとしよう……

……「声なき声によつて心が一つになる。

『萌えろ』と……！

会議室に綺麗に声が重なつて響く。

萌え男子と同じくらい嫌だ……。明らかに、マヨラーとかのバクリで、古い。時代遅れだ……。

「うむ、決まったようじゃな。『萌えラー』の雅樹よ」  
「異議あり！」

机を叩いて立ち上がったのは明神さん。叩かれた机にはさっきの一撃で縦に割れていた……。

「『萌えラー』ではありません！『萌えラー』です！『』の部分が大事なのです！間違えないでください、それは雅樹くんに対する侮辱ですっ！」

毅然と言った。周りも同意するように頷く。

「私が悪かった、許してくれ雅樹くん！」

それを受け、爺は土下座をせんばかりの勢いで俺に謝る。それはどうでもいいが、それよりも妙な二つ名をつけられた事の方が問題だ。こんな呼び名で呼ばれたら、すぐに飛び降りたくなるな、まじで。アイ・キャン・フライ……。

「彼も許してくれるでしょう。見てください、会長、雅樹くんの嬉しそうな顔をつ！」

「おお、明神くんっ！」

二人はひしつと抱き合う。俺の引きつった表情を見て嬉しそうだなんてどんな目をしてやがる！

二人が離れると爺はまた俺に向き直る。

もうどうだっていいから早く家に帰してくれ……。

死んだ魚の目をしている俺に、爺は唐突に告げた。



「私は子供じゃっ!」

「はい?」

「私は子供なんじゃああ!!」

爺は喚き出す。その叫びには魂が込められていた。

「大体、子供と大人の境界線とはなんじゃ?それは心!心なんじゃよ!私が自分自身を子供と思っている限り私は子供なんじゃ!」

無茶苦茶な理屈だ。頭痛がしてくる。あろうことか会議室にいる人も一様に頷いている。明神さん……それでいいんですか?ただ一人、俺の味方をしてくれそうな、女性である明神さんまで納得していた。だが、ここで抵抗しないと俺は変態街道まっしぐらである。『萌えラ』の雅樹として警察のブラックリストに載ること間違いなしだ。そして、いずれは国際的犯罪者……。

「そんな………屁理屈を」

「屁理屈ではない。絶対普遍の真理!国民の総意!」

いつの間にか全国民が変態にされている。とりあえず謝っておこう。………ごめんなさい………。ああ、こんなに罪悪感を抱いたのは生まれて初めてだ。

「………」

俺にかつてない絶望感が襲いかかる。

医者に余命半年を宣告されたぐらいのショックだ。

俺の呆然とした態度をどう解釈したのか爺は笑ってやがる。楽しそうに、きつと悩みなんて一つもないのだろう。

「そうか、そうか、どうやら雅樹くんも納得してくれたようじゃな」  
「なんだろう……この絶望と共に沸き上がる震えるような感情は……もう真面目とか優等生とかどうだっていい。なんたって俺の今後の未来を左右する問題だ。」

「ふ、ふふ、ふ」

「笑う程嬉しいか」

会議室は微笑ましい雰囲気に入れようとしている。

「ふざけんなー!!」

ぶち壊してやる!

「みんな死ねー!世界なんて滅んじまえー!!」

「ど、どうしたのじゃ、一体!??」

爺が仰天する。他の人も同じような反応だ。

最前列にいる眼鏡をかけた人がなんとか俺を抑えようとする。

「いけません、会長!萌えない症候群の症状が出ています!」

「それはいかん!皆の者!取り押さえるのじゃ!」

俺は数十人の変態によって取り押さえられる。

「俺は萌えない症候群なんて奇病じゃねー!」

俺の嘆きは会議室に悲しく響き渡っていた。





『続・青少年の憂鬱』(後書き)

変態ですが、何か？

はい、もう変態だらけですねっ！

これからもどんどん変態さが増していきますっ！

## 『変態の真髄』

数分後、俺は呆気なく取り押さえられていた。変態やオタクには似合わない、筋肉ムキムキの肉体派までいるとは まったくもって気持ち悪い。

体をロープで椅子に縛り付けられている状態だ。その様子を見て、明神さんと他何名かの変態が涎を垂らしていたが、恐いので見なかつた事にする。

「まあ、まあ、落ち着きたまえよ、雅樹くん」  
「……………」

俺は爺を睨む。こんな状況で落ち着ける奴がいるなら、一度会ってみたいものだ。きっと真性のMに違いない。

「え〜と……………」

爺が一冊の分厚い本を見ている。どうやら医学書のようだ。と、何かを発見したように手で文字を追っている。

「お、あつた、あつた。萌えない症候群……………別名、ノーマル症候群」

「なっ!?!?」

俺がばつと首を伸ばし、医学書……………らしきものをよく見ると、それは同人誌の一種だったようだ。世界で一番当てにならない医学書だろう。なんとってノーマルってだけで重病人扱いなのだから……………。一般的にはむしろこいつらの方が病人なんだけどな……………。

数分後、また何かを見つけたように爺は言う。

「なに、なに？萌えない症候群には積極的かつ残虐的かつ非道な責めが有効である。染めるもよし、溺れさすもよし、とにかく押しつけて押しまくるのが完治への近道である。また精神的にダメージを与えるのも効果的である（別名、脅し）。」  
「……………」

なんて医学書だ！俺は頭を抱えたかったが、縛られているためできない。こ、このままではっ！？

「よし！」

「なにが『よし！』だ！」

「今から雅樹くんを脅すことにする！」

なんの悪びれもなくそう宣言する。

「な、なな、ななな！！！」

「さすがに私も積極的かつ残虐的かつ非道な責めをするには良心が痛むしの……………」

爺が震える。だが、目が笑っているのは誤魔化せない。俺は、何をされるのが非常に気になるが、口には出さない。

「脅しは良心が痛まないのかよ！」

「脅しは『青少年教育委員会』では日常茶飯事だっ！」

胸を張って言う。そういえば俺がここに連れてこられたのも脅しと言えなくもない……………。他の変態も、批判的な目をしている奴は一人もおらず、それどころか舌なめずりしてる奴がいる始末。

そして爺は世にも恐ろしい表情へ変貌する。脅しのスペシャリス  
トの顔だ。悪魔のようだ。俺も全身が硬直する。

「たしか雅樹くんは、妹さんと、幼なじみというベタなジャンルの  
知り合いがいたよね？………恨めしい」

たしかに妹と幼なじみがいる。てか、ジャンル言うな……。  
しかも『恨めしい』って殺気が籠もってた？！

「君にはその子達、とその周りの女の子に悪戯をしてもらっ

「って、決定！？何の前置きもなく決定っ！？」

「決定事項だ」

爺はニヤリと笑う。正真正銘、本気のようだ。

「どうして、私達がそんな事を知っていると思う？」

「………し、調べたのか？」

「正解」

「ど、どうする気だ？」

「簡単な事だよ。その子達は私達にとっての人質という訳だ」

「ひ、人質？」

爺はとんでもなく外道で恐ろしい事をさらりと言ったのける。

「雅樹くんがこのまま拒否をし続けると、あの子達が………く  
つくつくっ！」

俺は生唾を飲み込む。噎れた笑い声。喜悦に歪められた濁った瞳。

………犯罪者だ………。今更のようにそう感じた。

そして、さらに深淵に一步近づく。

「他の『青少年教育委員会』所属会員の餌食となるわけだ」  
「なっ何っ!?!」

俺は目を見開く。え、ええええええ、餌食……だどっ  
!?!?!?!?

「危ないね、うちにはR18指定じゃないと語れない猛者達もいる  
というのに……」  
「……」

妹と幼なじみ……、そしてその周りの人達も人質……  
俺は……俺は……。

「……分かったよ」  
「もう一度」  
「分かったよ!」

こう言うしかない。屈服。屈辱。絶望。権力と金の前に、俺は膝  
をついたのだ。どうしようもない無力感に襲われる。

その瞬間、俺が膝をつくと同時に、爺の表情がもとに戻る。二へ  
ラとした、口臭と加齢臭にまみれた、爺に。

「いや、雅樹くんが物わかりよくて助かったよっ!」  
「……」

「じゃあ、これから私達が指令出していくから頑張るんだよっ!」  
「し、指定?」

「まあ、おいおい分かるさ」

冷や汗が背中を流れる。

俺がしぶしぶながらも同意したことで、会議室に和やかな空気が漂いはじめる。俺以外………だけど。

「……………」

それを俺は、ただ見守ることしかできない。何か大事なものを失ったかのような喪失感。

いつか………いつか絶対、復讐してやるっ！という怨念を胸に抱くことしか俺にはできなかった。

でもそれとは別にもう一つの感想を俺は抱いた。

変態って恐ろしい生き物だ………。

よい子のみんなは関わらないようにっ！

俺の身代わりになってくれる人、大募集っ！

『変態の真髄』(後書き)

いよいよ次からは学園編がスタートですっ！  
お楽しみにっ！



『妹+ツンデレ』

「お兄ちゃん！」

なんだか声がする。……………眠い。

「起きてよ、お兄ちゃん！」

揺さぶられている。……………眠い。

「起きろ〜〜〜〜！！」

「眠いつ！……………つて痛っ！？」

馬鹿でかい声で、俺は目を覚ました。ベッドの上ではなく床の上で。どうやらベッドから蹴落とされたようだ。腰が痛い。そして、その蹴落とした張本人と、視線が交錯する。

「……………おはよう、麗奈」

「……………おはよう、お兄ちゃん」

朝っぱらから俺と麗奈は睨み合う。バチバチと火花が散っているようだ。ここが二次元ならきつと散っているだろう。

「はあ、……………朝ご飯できてるよ……………」

しばらく睨み合った後、麗奈は溜息を吐いて視線をはずす。なんだか子供扱いされているようで気に入らないが、寛大な心で受け止めてやるのではないか。

「分かった」

こいつは天見麗奈。俺の妹だ。百五十センチくらいの小柄な身体、肩くらいまでの短めの髪、目鼻立ちもそれなりに整っている。まあ、可愛いと言えなくもない。

そして

「そ、そんなにじろじろ見ないでよ!」

「見てないって……」

「嘘!」

「嘘じゃないって」

朝からこいつはテンションが高い。

「それにもし見てたらどうだっていうんだよ?」

「え、……そ、それは」

「何だよ?」

「……っ、見てくれてたって嬉しくともなんともないんだからっ!」

「はっ!?!」

麗奈はそう言い残して俺の部屋慌ててを出ていってしまっ。

「……」

妙な既視感がある。

『『青少年教育委員会』風に言うなら、属性ツンデレ。』

なんか俺も毒されてきてるな……。

俺は部屋を出て、顔を洗い、歯を磨き、髪に櫛を通し、リビングに向かう。

「今日の朝飯、何？」

麗奈が朝食の用意をしながら言う。

「トーストとスクランブルエッグとサラダ」

家の家事全般は麗奈が担当している。

二年前、両親が交通事故で亡くなってからのことだ。それから俺と麗奈は兄妹二人で生活している。幸い両親がけっこうな額のお金を残してくれたので、生活に困ったりはしていない。なんだかんだで上手くやってこれてると思う。

「いただきます」

いつの間にか、朝食がテーブルの上に並んでいる。良い匂いが部屋を漂いながら、俺の腹の虫を刺激する。

「召し上がれ」

麗奈と一緒に手を合わせる。麗奈はこういう細かい所にうるさい。俺の行儀が悪いと何かと注意する。母親みたいな奴だ。

「今日も旨いな」

「そ、そう？」

麗奈が上目遣いで俺を見る。

「ああ」

「べっ、別にそんなお世辞言われても嬉しくないんだからねっ!？」

「恥ずかしそうにしている頬を真っ赤に染める。そんなに照れる」と  
とだるうか？

「そう言えばさ……」

「ん？」

「昨日どこにいったの？」

「うぐっ！？」

俺は口の中のものを吐き出しそうになる。麗奈の前で、麗奈がせつかく作ってくれた料理を吐き出す訳にもいかず、俺はなんとか水で押し流した。

そして昨日の悪夢をはっきりと思い出した。今まで忘れてた……  
・…というか現実逃避してただけだけど、思い出してしまった。

「べ、別になんでもない」

「なんでももの？」

「なんでもないって！」

「……そう」

麗奈の冷たい目。十中八九、疑っている。もうすこし兄を信用して欲しいものである……。

「私はてっきり変態に囲まれて変なことをされたり脅されたりしてたんだと思った」

「うっ！？」

なんだその具体的な内容は……。まるで見てきたようだ。

「って、そんな訳ないよね」

「あ、当たり前だろ！」

俺は微妙に頬を引きつらせながら笑う。麗奈、侮れん……………。

「じゃあ、そろそろ行こっか」

麗奈が立ち上がる。もう朝食を食べ終えていた。

「お前食べるの早すぎ……………」

俺は呆れながら言う。

「何かあった時のためだよ。例えば変態に襲われた時とか」

こいつ昨日の事知ってるんじゃないだろうな……………？

「へ、変態なんてそうそういないだろ」

俺は嘘を言う。ごめん……………、変態はぐるぐる回ります。しかも常人の想像を遙かに超えています……………。

「私、最近変態に会ったよ」

「えっ!?!」

驚愕の事実だ。俺は思わず立ち上がり、目を泳がせる。

「なんかね、なんとか委員会の会員さんで……………、蹴ってくだ  
さいとか言われた」

「ど、どうしたんだ？」

「ん？蹴ってあげたよ。めちゃくちゃ嬉しそうだったよ……、キモイとかゴミ虫とか言ったら余計に喜ぶの」「お前さ……、危機感持てよ……」

一応お前は人質なんだから……。それにしてもゴミ虫って……何げに酷いな。

「でも大丈夫でしょっ！」  
「なんで？」

麗奈があまりに自信満々に胸を張るから余計に気になる。

「だって変態は所詮変態だし。強姦魔とかよりはずっと安全でしょ？」

それは常識的(?)な変態の話だ。非常識の塊と言っても過言ではない、『青少年教育委員会』には当てはまらない。18禁の変態とかもいるって言ってたし……。

「それは変態を見くびりすぎ」  
「なんかお兄ちゃん、変態に詳しそうね……」

詳しくなりたかった訳じゃないけどね。

「まあ、油断すんなってことだよ」

それは俺にも当てはまることかもしれない。なんたって俺は麗奈達に対して、い、悪戯をしなければならぬのだからっ！でも仕方ないのですっ！悪の権化たる変態、変態を越えた変態の集団、キングオブ変態から麗奈達を守るにはそれしか手段がないのだから……し、仕方ないんだぞっ？！

ピンポーン。

俺が心の中で自己弁解をしていると、玄関からチャイムが鳴る。

「遙さんが来たみたいだよ」

「分かった」

俺は急いで残りの準備を済まして玄関に出る。

いよいよ現れたようだ。悪の組織に狙われた幼なじみが。

『妹+ツンデレ』（後書き）

学園編突入っ！

これから雅樹が学園内でイケナイ事を  
！？



『幼馴染み＋天然』

俺が玄関に出ると、呑気な笑顔の幼なじみがいた。

「雅樹ちゃん、おはよう〜！」

朝っぱらから気の抜けるような笑顔と声だ。

「ああ、おはよう」

「おはようございます」

俺は適当に挨拶を済ます。

こいつは遊佐遙だ、俺の幼なじみである。麗奈よりも少しだけ高い身長と大きくて綺麗な瞳が印象的だ。辛口の俺から見ても可愛いと思う。ちなみに巨乳だ。

属性は

「じゃあ、出発〜！」

今時小学生でも恥ずかしがるだろうかけ声を手を挙げながら言う。

「あう！」

そしてステンと思いつきり転ぶ。障害物となるような物はなにもない。ただの平地で見事に転んだのだ。

「.....」

「.....」

俺と麗奈は無言。毎朝の事とはいえ、呆れてしまつ。  
見ての通りのドジッ子属性である。ベタすぎる……。

「だ、大丈夫ですか？」

俺よりも先に我を取り戻した麗奈が遙に駆け寄る。

「大丈夫、大丈夫！」

遙はそう言っているが、俺にはそう見えない。なにせ地面には血がベツトリと付いているのだから。

「ひっ!？」

麗奈もそれに気づいて一歩さがる。

「じゃあ、気を取り直して行こう！」

学園指定のセーラー服を真っ赤に汚した少女が言う。まるで殺害現場のようだ。しかもその少女が楽しそうに笑っているものだからなお恐い。

「お、お前……、その……血……」  
「血？」

遙は今気づいたように制服を見る。

「あああああああ!?!?!?!?!」

絶叫。

「ケチャップが!!」

「ケチャップ!?」

俺と麗奈が同時に叫ぶ。

なぜケチャップが……。

「お弁当のやつをポケットに入れたままだったんだよ!」

「何故ポケットに?」

「えっとね、それは……。」

なんでもお弁当箱に入れようと思って保存用ケチャップをポケットに一時的に入れていたのだが、忘れていたらしい。そして今転んだひょうしに、破裂してしまったようだ。それにしてもどんな馬鹿でかいケチャップを持ってきてるんだ……。辺り一面を赤く染めるなんて……。

「やっぱりお徳用だったからいけないのかな……。」

「馬鹿かお前は!?!」

遙が出したのは、巨大な容器だった。俺は市販のお弁当とかについてる小さい奴かと思っていたのだが、甘かったらしい。

「あうう、間違えておっきいの持ってきてちゃったよ」

今更どうやったたら間違えるんだ?なんて事は聞かない。

「はあ、お前は本当に子供だな……。」

「むうう!は、遙子供じゃないもん!」

遙は頬を膨らます。

そついう仕草が子供っぽいんだが……。

「……………もう！早くしないと遅刻だよ！」

麗奈が少し離れた所で大声を出す。切り替えの早い奴だ。

俺達が二十分程歩いた先に、学園はある。周囲を木に囲まれた世間から隔絶されたような場所だ。私立聖森学園。まるでお嬢様学校のような名前だが、そんなことはない。なんたってこの学園も『青少年教育委員会』の息がかかっているのだ。理事長、学園長、教頭という学園上層部が会員だ。俺も『青少年教育委員会』に入ってからそれを知った時はくらつとしてしまった。寄付金とかも貰っているんだそうだ。そのためか、学園の敷地は広く、施設も充実している。

「何回来ても場違いな気がする」

麗奈が呟く。

麗奈は今年から聖森学園に入学してきた。俺も入学当時は同じような事を考えていた気がする。さすがに一年以上通っていたら慣れたが……………。

「でも麗奈はどうして聖森学園に決めただ？」

俺はふと疑問に思っていた事を聞いてみた。聖森学園はそんなに倍率が高い訳ではない。頭のいい麗奈ならもつといい所にも入れたはずだが……………。

「え？あ〜と、えつと……」

何故か口ごもる。

「？」

「そんなの決まってるじゃない、雅樹ちゃん！麗奈ちゃんはね〜、雅樹ちゃんと同じ学校に通いたかったんだよ！」

「そ、そんな訳！てか今更そんな事聞く！？入学してから半年以上経ってるんですけど！？」  
「だって別に気にならなかったし……」

「だったら気にしなくてもいいじゃない！」

麗奈はプイと横を向いてしまう。しかし顔は真っ赤になっているのは隠しようがなかった。

「何顔真っ赤にしてるんだよ……」

「赤くなんかなくてない！てか勘違いしないでよね、お兄ちゃん！べ、べつに同じ学校に通いたかったとかそんな事考えてないんですからね！」

麗奈が俺の方をぱつと振り向いて言う。

「は、はい！」

その剣幕に俺は頷いてしまう。

「あはははは」

遙は一人笑っている。

「そこ！笑わない！」

俺と麗奈が同時につっこむ。兄妹だけあって息はぴったりだ。

「はう……」

「今日も良い朝ですわね、こんな日は私とベットインでもしませんこと？」

遙がしぼんでいると、突然後ろから声をかけてくる奴がいた。内容も馬鹿丸出しだ。

俺がまたか、と嘆息していると、そいつは俺の前に回ってくる。

「おはようございます、朝生さん」

俺が丁寧に挨拶をする。俺が本性を現すのは麗奈と遙の前でだけだ。それ以外では真面目な優等生で通っている。麗奈と遙はいつもと同じように俺の変わりように呆れていた。

「あら、棗と呼んではくださらないの？でもそんな貴方が素敵ですわ……」

棗はうつとりとした表情をする。

こいつは朝生棗。俺と同じ聖森学園二年生で遙と同じくクラスメイトでもある。二年生に進級したと同時に「抱いてくださらない？」と大胆な告白をされてから付きまとわれている。一応、旧家である朝生財閥の令嬢だという話なのだが、俺には納得できないってか信じられない。これが本当ならエロ系お嬢様なる新ジャンルだ。

「何度も言ってるでしょう……、俺は朝生さんとお付き合い

する気はないって……」  
「ええ、聞きましたわ！」

自信満々に答える棗。

「でも私は構いませんわ！」

「俺が構いますよ！」

「私には金と権力という信用できるお仲間がいますの。どれだけ抵抗しようとも貴方は私のものですわ！」

棗は「おっほほほ」と高笑いを始める。

「……」

金持ちって奴は……！棗だけ『青少年教育委員会』に売ってやろうか……、いや、だめだ。こいつならそれさえも味方につけかねない……。この二つが手を組んだりしたら……。あまりに恐ろしい想像に俺は青くなる。

「だめだよ、棗ちゃん。雅樹ちゃんは遙のお婿さんになるんだからね！」

「誰が誰のお婿さんだって？」

俺はジト目で割り込んでくる遙を見る。

「照れちゃだよ」

「照れてないよ」

「そうですね！照れなくてもよろしいのに」

二人は対抗するように俺に擦り寄ってくる。

しかも近づいたたびに、甘い香りや柔らかい感触を感じる。これは・  
・・・、マズイ!

天見雅樹17歳、貞操の危機である。

「ちよつと待ちなさい!」

「おお、妹よ!」

このピンチに現れたのは麗奈だった。

「お、お兄ちゃんは私のお兄ちゃん、ずつとずつと私のお兄ちゃんなんだから!私だけのお兄ちゃんだから!だから棗さんとベット・  
・・・、その・・・イン・・・とか、遙さんのお嬢さん  
になったりしないんだから!」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

三者三様にポカンとした顔をする。

麗奈も言い終わって意味に気づいたのか、首まで真っ赤になっている。

「~~~~つ!~!」

麗奈が俯く。

俺はこの先の未来を用意に予想できた。いとも簡単に、である。  
そしてついに麗奈はその言葉を小さな口唇から発した。

「か、勘違いしないでよね、お兄ちゃん!」

そう言い残して、麗奈は走り去る。あの・・・・・・・・麗奈さん?



しかし、麗奈は去ったが、残された俺に対する被害は甚大だった。今は登校中である。よって周りに他の生徒も大勢いるのである。しかも麗奈の声は遙や棗のものより、大きかった。これらの要素が重なって引き起こされた状態は

ヒソヒソ。

「天見先輩って……」「二人で暮らしてると話よ……」「密室の空間で何が!?!」「……兄妹同士による背徳と悦楽の夜」エトセトラ、エトセトラ。

どんどんと加速していく妄想、堕ちていく俺の評判、じゅるりと涎をすする眼鏡ツ子達……。

天見麗奈十六歳、ツンデレ改め、天然系(?) ツンデレ属性。重度のブラコン要素を持ち合わせた可憐なる美少女……。

皆……、そんな目で俺を見ないでくれ!

ちなみに俺は見られても興奮したりしてないからな!!

『幼馴染み＋天然』（後書き）

いよいよ幼馴染みが登場しました。

いいですね、幼馴染み。

作者にも幼馴染みがいれば……。

そんな訳で、今回も読んで頂きありがとうございました。

ご意見、ご感想ありましたら、何でもください！

「ふ、ふんっ！別に感想貰えないからって寂しくなんかないんだからっ！」

『メイドさんと俺』

事件とはふいに訪れるものだ。

俺の都合なんてまったく考慮してくれない。

で、何があったかというと

昼休みのことだ。俺はいつも通り、遙と一緒に学食に行こうと思っ  
っていた。

ピンポンパーンポーン。

間抜けなチャイムの音が、校内中に響き渡る。

『二年A組の天見雅樹くん、至急学園長室までお越しく下さい。繰  
り返します……』

スピーカーからはそんな声が聞こえてきた。

俺か？呼び出される理由なんてないんだけどな……。

「雅樹ちゃん、行かなくていいの？」

遙が俺を見上げる。

「……何の用だろう」

「何かしたの？」

「……いや、記憶にない」

まったくもってない。間違いなくない。

「でも早く行った方がいいよ？」

「あ、ああ」

でも、この不安はなんだろう。つい最近、てか昨日にも感じた不安だ。正直言って、かなり行きたくない。

「じ、じゃあ行ってくるわ」

真面目な優等生である俺が行かない訳にはいかない。そんな訳で俺は一歩進んで二歩下がるって感じで歩き出した。実際は後退してるけど、気にしないでくれ。

そしてついに辿り着いた学園長室。ちなみに俺は学園長と面識はない。やたらと豪華で無駄にでかい扉だ。つまり学園の偉い人である。つまりお金持ちである。ということは、金持ち＝変態、の方程式が組み上がる訳でして……。

「……入りたくねえ……」

怪しい匂いがぶんぶんしてくるようだ。

そして俺が扉に手をかけ、開けようとした次の瞬間

パーン、パーン。

部屋の中からクラッカーを鳴らす音が聞こえてきた。

俺まだ入ってないんですけど……。てか何故クラッカー？俺の嫌な予感もうマッハを越えて暴走しまくりだ。

俺は微妙に入りにくさを感じながらも、扉を開けて入る。

「おお、やっと来たか！」

「よっこそいらっしやいませ」

そこにはゴツイ体育会系のオッサンと……………。

「……………」

俺はポカンとしてしまう。

だって部屋の中にメイドさんがいたら誰でも驚くだろ。学園内だし……………。

そう。流暢な日本語で、銀髪の綺麗なメイドさんが俺に向かって丁寧な頭を下げていたのだ。

「……………あ、いらっしやいました」

呆然とした俺はそんな馬鹿な答えを返すことしかできない。

「ほうほう、雅樹くんは天然属性……………」

そう言いながら、ゴツイおっさんがメモを取っている。

「あ、あの……………?」

とりあえず俺が天然属性だと認識されたのはもうどうでもいい。

一刻も早くこの場から逃げたいという思いが俺を支配していた。

この人（おっさんの方）からは匂いがするのだ。変態の匂いが……………！あと加齢臭も。

「おお、すまん！今日雅樹くんを呼んだのは他でもない。『青少年教育委員会』についてだよ」

「……………やっぱり」

ここまできると諦めの境地だ。

「是非とも私も雅樹くんを祝福しなくてはと思ってね！」  
「祝福……ですか？」

思いも寄らぬ言葉に俺はポカンとする。

「そうとも！めでたいではないか！雅樹くんは将来、最高幹部入り  
確実と言われているそうじゃないか！」

「え！？」

「会長が言っていたよ、雅樹くんには変態になる才能があると！百  
年に一人の逸材だとね！」

そんなのいないから……。平穩に暮らしたい……。  
てか百年に一人って……。いつの間にかスケールがでかくな  
ってるよ……。

俺はなんだか泣きそうになった。

「……僕に才能なんてありませんよ。僕はノーマルですから  
！」

そう、俺はノーマルなのだ！そこを強調して言った。

「私の尊敬する初代会長も仰っていた、ノーマルと変態は紙一重  
だとね！」

それは違うと思います。てか誰だ！こんなアホを学園長にしたの  
は！やっぱり世の中金なのか！？金があれば何でも許されるのか！？

「さあ、さあ、諦めるんだ。そして生まれ変わりなさい、きつとす  
ばらしい快樂をえられるだろう」

完全にいつちやった目をしている。ぱちぱちぱち……  
って、メイドさんも拍手いらさないから！

「さあ、って言われても……」

「……情けない」

「情けないです」

メイドさんに言われたのが傷ついた。

「……」

「ところで雅樹くん」

悲しそうに伏せていた瞳にまた光が戻る。

「はい？」

「このステファニーを見てどう思うかね？」

ステファニーというのが、メイドさんの事を指しているのだということは分かった。長い銀髪と碧眼の、美人というよりは可愛らしい感じの女性だ。年齢はよく分からないが、恐らく二十代前半より上ということはないだろう。

「いや……、可愛らしい人だなと」

俺は素直に答える。

メイドさんは「まあ」と頬を赤くする。

「可愛らしいというのと、このメイド服のことかね？それともステファニー自身のことかね？」

「どちらもですけど……」

質問の意図がよく分からない

「ふむう……」

学園長は腕を組んで、何事かを考える。

「つまり雅樹くんはメイド服フェチで銀髪の外国人が好みという訳じゃな？」

「……違います！」

どうしてそうなるんだ……。どうにも変態は何でもかんでも、フェチや属性にもっていきたがるらしい。

「……どうやら本当のようじゃな」

「へっ？何がです？」

「昨日、会長から話を聞いたときは半信半疑だったのだが……信じぬ訳にもいかないようだ……」

そう言っつて、学園長は俺を未知の生命体を見るような目で見る。非常に心外である。

つまり、学園長も昨日の忌々しいゴタゴタを耳にしたということだろう。揃いも揃って同じような反応をしやがる。

「で、じゃ。実は私が会長から指令を預かっていてね」

「し、指令ですか……」

確かそんなことを言っていたような気がする。いつくるかと戦々恐々していたが、ここでくるとは想像していなかった。ここは学校



ですよ！あなたは聖職者ですよ！勉強するところですよ！もちろんアレな勉強じゃないですよ！

俺の心の声はもちろん聞こえない。

こうなればアイコンタクトを……………。

ニコツ！

「がばっ!？」

撃沈。ステファニーさん、強すぎです……………。

「では発表するぞ！」

とうとう来た。

「くぐり」

俺の喉が鳴る。

「ミッション1、メイドさんと遊ぼう」

しゅん。

部屋が静まりかえる。これはイタイ……………。

「……………は、はい？」

意味が分からない。まるっきる分からない。

「初日だからお試しだそうだ。もちろん、メイドはここにいるステファニーだ！」

学園長がステファニーを指す。紙吹雪が舞っていた。もちろんス

テファニーさん特製のものだ。

「よろしくお願いいたします、ご主人様」

今まであまり表情を変えなかったステファニーさんがニコリと笑う。反則的に可愛かった。さっきよりも気持ちが入もってる感じがメイド服もいいなんて思ってしまったそうだ。これも作戦なんだろう。

「い、こちらこそよ、よろしく」

俺もとりあえずそう返す。ここで拒否しても無駄だというのは昨日の経験からも分かり切っている。

「今からこの携帯電話で私が指示を出すから、今日はそれに従うのだ」

そう言って、俺はステファニーさんと廊下に放り出されたのだった。

『メイドさんと俺』（後書き）

「意見・感想、どうぞお待ちしておりますっ！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0494h/>

---

【青少年教育委員会】

2010年10月9日01時37分発行